

日米新聞特派員鷺谷精一

鷺谷がメキシコに入ったのは、パンチョ・ビヤがチワワへ復帰してから二月余り経った1913年5月の初めであった。この頃カランサ軍は連邦軍にコアウイラ州都サルティヨから追われ、モンクローバさらにピエドラス・ネグラスまで追い詰められていた。鷺谷がやって来たピエドラス・ネグラスには、カランサ軍の本営が置かれていた。鷺谷はサンアントニオでバルデスとサリナス・カランサの二人のカランサ軍将校と落ち合っていることから、明らかに事前到手配されていたと思われる。鷺谷の記事の中には、テキサスに住む藤田、岡崎、農場経営者岩村の三人の名前が登場する。これらの誰かが仲介したことも考えられるが、テキサス在住の日本人がメキシコ革命に関わっていたという事実は見当たらず、日米新聞社の手配であったとするのが自然であろう。鷺谷は前の年、ラレドから鉄道でメキシコ市を訪問しているので、これが二度目のメキシコ入りであった。

鷺谷はピエドラス・ネグラスから「滯墨餘滴」と題した記事を発信し、7月3日から十三日間、日米新聞に掲載された。終始カランサ軍本営で取材に当たっていたと思われる。記事の中に、同地で鑄造された砲弾の試射をカランサ軍将兵に伴って見学した記事がある以外は、あたかも旅行記のような内容で、メキシコの気候、習慣、食事、アメリカとの違いなどが主題となっている。この頃、この町でテキサス攻撃隊に日本人を斡旋した寺沢福太郎が雑貨店を営んでいたはずであるが、彼の記事を読む限り、ピエドラス・ネグラス滞在中に日本人と接触があったという記述はない。²⁵

鷺谷が記事を書き終わった直後、彼はメキシコ市へ移動を命ぜられた。鉄道が不通のためガルヴェストンかニューオルリンズから海路ベラクルース経由のルートを選んで、イーグルパスへ向かった。朝十一時二十分の列車に乗るつもりで出かけたが、移民局で待たされ、尋問が終わったのは十二時過ぎであった。局長は上司に決裁を仰ぐと言って出て行ったが、三時過ぎ陸軍大尉と一緒に現れると、合衆国への入国を拒否すると言った。理由は中立法違反であった。大尉は詳しい理由を知らない、ただ上官からそう伝えられただけであると言い、不服があればワシントンに上告するようにとだけ言って、否応なく軍用馬車に乗せられ橋の真ん中で下ろされた。

鷺谷が入国して間もなく、連合通信社からの発信で、次のような内容の記事が新聞に載ったことを彼は知っていた。「鷺谷が、日露戦争を戦った経験のある二千から三千の日本兵をカランサ軍に提供することを申し出た。費用は全て鷺谷が負担し、勝利した後には何か大きなものを要求するであろう。鷺谷は表面上個人で振舞っているように見せているが、彼は元陸軍大佐で、陰で日本政府との繋がりがある。成功したら南カリフォルニア半島のマグダレナ湾に日本海軍の軍港を築く」という荒唐無稽な記事がテキサスの新聞に掲載され、あたかも国家の大事件であるかのように大騒ぎとなり、「墨国における日本人の活動」という論文まで顕れた。鷺谷はアメリカへ出発するにあたり、カランサ軍本営司令官カルサダに相談した。カルサダは逮捕されるようなことがあれば、保釈金は二三千ドル程度で

済むであろうから、必ず引き受けてやる、と約束してくれていた。26

翌日十日、鷺谷は日米社へ事情を報告し、日本総領事館を通じてワシントンへ控告することを依頼した。十一日の朝、日米社からの確認の電報を受け取った鷺谷は、午後インターナショナル・ブリッジへ出かけ、米国陸軍サイベリー大佐に面会することが出来た。そのとき知ったのは、ウエルタ政府軍に属する者も、憲政軍に属する者も、この戦争中はアメリカへ入ることを禁止する法律が一週間前に公布されていた事であった。そのような法律が出来たと言うのであれば、一昨日何故自分を尋問し、事の真相を質そうとしなかったか、との質問に対しサイベリー大佐は、鷺谷が憲政軍の参謀であることは余程前から聴いていたこと、新しく铸造された砲弾の試射を行い、そのときの操練を司ったこと、軍用地図を作成しカランサ総司令長官に渡したこと、鷺谷は憲政軍の将校倶楽部で将校や政治顧問と寝食を共にしたことなどから、中立法違反と断定するには充分であると言った。これに対し鷺谷は、自分が日本陸軍の大佐になるには若すぎることを、日露戦争が勃発したときには既にアメリカに来ていたこと、軍事上の知識も経験もないことなどを上げ、新聞風説の根拠がないことを説明した。サイベリー大佐は頗る温良の人で、鷺谷の話静静地に聴いていたが、自分は上官の指図に従う以外に方法はなく、明日には何らかの連絡があらう故、もしなんらかの訓電があれば、ピエドラス・ネグラスの米国領事を通じて連絡するので、今日のところはお引き取りくださいと鷺谷は帰された。27

その日の夕方、鷺谷は宿を変更したので、新しい住所を米国領事館へ知らせるとにした。出てきた若い副領事は、名刺を差し出す前に「良く存じ上げております鷺谷様」と親しげに言うと、領事は今来客中ですが、間もなく終わりますのでお待ちください、と椅子を勧めた。鷺谷は領事の名前はルーサー・エルスワースで、白髪頭白髪髭であることは知っていたが、話をするのは始めてであった。エルスワースは常日頃ワシントンへの報告書の中でとかく憲政軍を悪く報告しているため、ワシントン駐在憲政軍代表者は國務長官ブライアンあてにエルスワースを召還するよう求めていることも鷺谷は知っていた。エルスワースは鷺谷が入国を断られたことなど具に知っていたはずであったが、「ご用件を伺いましょう」と穏やかな顔で切り出した。鷺谷が来意を告げると、領事は冷たい笑みを浮かべて切り出した。あなたが憲政軍将校である以上、新法による入国拒否は止むを得ない。いくらあなたが否定されても、この町にいる誰もがあなたを憲政軍の大佐であると信じています、私もそう信じますと言った。鷺谷は何故そのように結論付けるのか論拠を伺いたいという、あなたは地図を作成してカランサ軍に渡し、さらに、カランサから毎月五千円を貰っていること、誰も入れないはずの铸造所に入り、その試射に立ち会ったこと、兵士の操練をしたことなどを上げた。これらを全て否定した鷺谷へ更に、あなたは憲政軍将校及び政治顧問の宿舎に寝泊りしていること、本営に入るとき、誰でも炎天下で二三時間も待たされるのに、あなたはすぐ中へ通されるのは、明らかに憲政軍将校である証拠です、と言った。鷺谷が、憲政軍倶楽部ではなくただの下宿屋であること、最初はホテルに泊ま

ったが、その下宿屋を勧められたために移ったと言うと、エルスワースは、最初はホテル・カナレスで、次がナショナルであったことは全て承知していると言い、あなたの写真もあります、と数枚の写真を見せ、自分は長年秘密探偵を経験し、憲政軍の内部事情は全て知っていると言った。領事が最後に言ったことは、この町がウエルタに攻め込まれたときの憲政軍守備計画のことであった。それによると本営、鉄工所、駅、を爆破し、領事館にダイナマイトを投げ込み領事を殺す計画が将校倶楽部で謀議されたが、このようなことを計画できるのは外国人に違いなく、外国人はただ一人あなただけだ、と言った。その日は結局水掛け論に終始したが、司令官から電話があったら即連絡すると言うことになった。

28

翌十二日、本営の前を歩いていた鷺谷に領事からの使いが来て、直ちにお目にかかりたいとのことで、早速領事館へ行くと、領事は合衆国への入国許可が下りたことを伝えた。鷺谷は、出発前本営のカルサダに別れを告げると、朝十時過ぎ、橋へ向かった。今度、兵隊はいなく、三人の移民官から尋問を受けただけで、十二時には入国することが出来た。この新しい法律は名ばかりのもので、鷺谷が暫く起居を共にした憲政軍将校の数名が何の問題もなくアメリカに入国していた。この公平さを欠く処遇は、自分が日本人であったからであると鷺谷は断定し、その原因を彼等の日本人に対する恐怖と嫉妬であるとした。メキシコ人の日本人に対する好情は在米邦人の想像を絶するもので、海外では東西南北どこでも排斥される日本人が、不思議にメキシコでは大もてをしている。様々な理由はあるが、手っ取り早く言えば、多年の仇敵アメリカに対抗するには、新進勇武の国にして、とかく米国と利害の衝突を免れない日本と握手せねばならぬ、と鷺谷はいう。この気運はメキシコいたるところにあり、メキシコに接触しているアメリカ人はこれをよく知っている。ピエドラス・ネグラスではアメリカ人は領事でさえ隅の方を小さくなって歩いていたが、鷺谷は至る所で優遇を受けた、とこの事件の報告を締めくくった。29

五月はじめ、鷺谷がピエドラス・ネグラス入りして間もなく、エルスワースは一連の電報を國務省宛に発信した。その内容がテキサスの新聞にセンセーショナルな記事となって掲載されたのである。反中立法取締りグループの頂点にいたルーサー・エルスワースは、マデロが政権を握った頃から影響力を失いはじめ、法務省から解任されていた。彼はマデロ政府筋と親密な関係を作ることが出来なかったのと、彼一流の誇張した報告により周囲から敬遠されるようになっていた。エルスワース自身も自分が疎んじられていることを知っていた。そうした時に鷺谷が現れたので、自らを再び売り込もうとしたのではなかろうか。

7月中旬、鷺谷がメキシコを離れた数日後、ウイルソン大統領は駐墨大使ヘンリー・レーン・ウイルソンを召還し、大使とウエルタが密着している問題を解決し、反ウエルタ外交政策を鮮明にした。その直後17日、エルスワース領事は辞表を提出し、直ちに了承された。鷺谷事件は領事が手がけた最後の仕事であった。エルスワースはカランサ派との関係を悪化させ、命を狙われていたが、それに怖じるような男ではなかった。事実、辞任の理由は

喉の病気で、退任後何度か手術を受けたが翌年7月、故郷オハイオで亡くなった。30

25. 日米新聞、July 3 ~ July 17, 1913

26. Ibid. July 25, 1913

27. Ibid., July 28 and 29, 1913

28. Ibid., Sept. 31 ~ Aug. 3, 1913

29. Ibid. Sept. 4 and 5, 1913

30. Dorothy Pierson Kerig, "Luther T. Ellsworth; U.S. Consul on the Border During the Mexican Revolution"; Texas western Press, The University of El Paso, 1975, P60